

すみれの花の歌

—ひとつの文学鑑賞—

鈴木保昭



すみれの花の歌

—ひとつの文学鑑賞—

鈴木保昭



ニオイタツボスミレ
Isuo

鈴木保昭（すずきやすあき）

専修大学教授（専修大学に21年勤務）を経て

立正大学文学部・大学院 教授

文学博士 日本ホイットマン協会会長 日本ペンクラブ会員

著書：『白樺派の文学とホイットマン』（東京精文館）

『ホイットマン「ゆりかごの歌」研究—その成立と展開』（現代社）

『大道の歌—ホイットマンの愛の讃歌』（翔文社）

『比較文学への道』（翔文社）

『日本の英学100年』〔共著〕（研究社）

『花に関する五十章』〔共著〕（講談社）

現住所：〒168 東京都杉並区和泉1—50—3

すみれの花の歌——ひとつの文学鑑賞——

1990年6月29日初版

著 者 鈴 木 保 昭 ©

発行者 大 熊 武 夫

発行所 専修大学出版局

〒101 東京都千代田区神田神保町8—8—3

電話 03—263—4230 振替 東京2—1783

印刷所 三美印刷株式会社

ISBN 4-88125-047-7 C0090

まえがき

——「どんな新しい葉も、どんな珍しい花も、何か或る秘密がそとに現はれ出たもので、それが愛や喜びのために動くことができず、言葉を出すこともできないので、無言の、しずかな草木になるのだ。このやうな花をさびしいところで見つけると、周囲のすべてが光明にかがやいて、さやかな翅のひびきも、そのそばを何よりも喜んで離れられないやうにも見えるではないか。そのときは嬉し泣きに泣きたくなり、この世をはなれて、手と足を地中にさし込み根をはやして、この幸福な場所のあたりを去りたくないと思ふ。乾からびた全世界一めんはこの緑の、神秘的な愛の毛氈が敷かれてゐるのだ。春の来るたびに毛氈は新しくなる」——

(小牧健夫 訳)

ドイツ・ロマン派の代表的詩人の一人、ノヴァーリス (Novalis 1772—1801) の名作『青い花』(第二部)の一節である。

私は、この詩的文章が好きで、野山を歩くといつも思い出すのである。

ノヴァーリスは、すみれの花を連想してこの一節(「老人の言葉」)を書いたのではないだろうか、と私は想像してみる。それにしても、なぜ、すみれに生まれたのだらうか。「愛」や「喜び」あるいは、「悲しみ」や「苦しみ」を言葉に表現出来ない植物に生まれたのだらうか。いや、言葉を持つ人間よりも、無言の花に生まれた方が幸福かも知れない、とも私は思うことがある。

それにしても、ノヴァーリスが書いているように、さびしい野山で、すみれの花や、ほかの美し

い花々を見ると、私達は生きている幸せを感じ、あたり一面が、まさに、光明に輝いていることに気づくのである。

毎年、巡りくる早春と共に、私の心に刻みつけられ、胸の底にいつも咲いている薫り高いすみれの花。いや、一年中いつも私の脳裏から離れないすみれの花。人目につかず、ひっそりと、慎ましく咲く、美しい紫色の花。

私は、長い間、すみれを歌った詩歌に、特別の関心を寄せてきた。
本書は、私のそのような気持ちから生まれたものである。

私が、今まで折りに触れて読み、鑑賞してきた作品、また、大学や大学院での講義や演習でとりあげたものなどを整理して、不十分ながら一書を編むことにした。

たくさんさんの花の中から、すみれだけを取り上げて、このような形で一書を編むことに、私自身、多少の戸惑いがなかったわけではない。だが、これも文学鑑賞の一つではないかと思い、また、友人、教え子の皆様からのご希望もあつて、書物にまとめることにした。

また、昨年(平成元年十月十四日)、専修大学と神奈川県教育委員会主催、川崎市教育委員会共催の「公開講座」で、「文学にあらわれた すみれの花」というテーマで、本書に書かれている内容の一端をお話したとき、多くの聴衆の方々から、本にまとめて欲しいという嬉しいご要望もあり、そのご好意にもお応えしたいと思っていた。

このささやかな書物がきっかけになって、本書に収録されている詩人、歌人、俳人、作家の作品

をさらに広く、深くお読みになり、文学に一層興味を持つようになっていただければ、筆者の望外の喜びである。

なお、本書には、すみれを主題にした作品から、すみれに僅か言及したもの、また、僅かではあるが、私がすみれの花に見立てて考えたものまで収録されている。ご関心のあるところを選んでお読みくださるようお薦めしたい。原稿執筆以来、かなりの歳月が経っており、多少、文体、構成の相違がある個所があるが、ご容赦いただきたいと思う。また、不備な個所、私の思いちがいの部分が多々あることと思う。皆様から、ご教示いただければ幸いである。

まだこのほかにも、すみれを主題にした作品、すみれに言及したものはたくさんあることと思う。私の狭い読書範囲から私の集めた資料でも、本書に収録できなかったものもかなりあるし、全体のバランスの上から、惜しくも省いてしまったものも幾つかある。例えば、シェイクスピア、イギリス・ロマン派の詩人の作品をはじめ、英文学にはまだ相当数の作品がある。更に読書を重ね、拡充整理して、いずれ、機会を見て、もっと多くの作品を織り込み、充実した興味ある書物にしたいと願っている。

なお、三色すみれさんしきⅡパンジー (a pansy) もスミレ科に属するが、別種の花なので、本書には特に扱っていないのでご諒承願いたいと思う。

本書を出版するに際しては、専修大学出版局代表・大熊武夫氏や広瀬好一氏、また、元専修大学文学部教授平野 明先生（専大センチュリー取締役）に一方ならぬご指導、ご配慮を賜った。厚く御

礼申し上げる次第である。さらに出版局の石井 徹、飯山富蔵両氏には、編集、校正の面で格別のご配慮にあずかるなど、出版局の皆様感謝の気持ちで一杯であり、改めて心から厚く御礼申上げたい。

なお、草花の画家として著名な、石川功一画伯が、本書のために素晴らしく魅力的なすみれの花の絵を描いて下さった。お忙しい中を特に本書刊行のために一役買って下さったことに深く感謝の意を表したい。

平成二年早春

すみれの花咲く季節に

著 者 しるす

目次

第一部 すみれ (violet) のこと 1

すみれ百科 2

「すみれ」という言葉 すみれ漢字考 さまざまなすみれ

すみれの花と葉 植物誌の中のすみれ

すみれと人間の生活の一断面 7

食用としてのすみれ ワインやシャーベットやサラダに

薬用としてのすみれ

すみれの代表・においすみれ 10

においすみれ つぼすみれ

すみれの魅力 13

すみれの「花言葉」 すみれの「花と色のシンボル」

すみれはアテネのシンボル すみれはキリスト教のシンボル

董色は「いき」な色

すみれに関する民俗誌 19

柳田國男『野草雜記』より―すみれの方言ほか

日本の伝説 23

順徳院『野辺の昔の物語』

ギリシャ神話の中のすみれ 25

四つのギリシャ神話

第二部 日本文学の中のすみれ 29

短歌、俳句に詠まれたすみれ 30

短歌の中のすみれ 30

山 部 赤 人 高 田 女 王

清 少 納 言 和 泉 式 部

相 模 能 因

大 江 匡 房 藤 原 公 実

藤 原 顕 季 藤 原 俊 成

慈 円 藤 原 家 隆

藤原定家 藤原為家
西行 源実朝
伏見天皇 正徹
賀茂真淵

俳句の中のすみれ

松尾芭蕉 与謝蕪村
小林一茶 夏目漱石

正岡子規 (短歌と詩も)

高浜虚子

他のすみれの短歌と俳句

近代、現代の詩歌、小説の中のすみれ

幸田露伴「ひとよ草」より

薄田泣菫「白すみれ」「大葉黄すみれ」

土井晚翠「星と花」

島崎藤村「おえふ」より

國木田独步「菫」ほか

三好達治「すみれぐさ」「春のあはれ」

第三部 海外文学の中のすみれ……………103

ギリシャ、ローマの文学に歌われたすみれ……………104

ホーマー（ホメロス）「デーメーテールへの讃歌」より

ピンダー（ピンダロス）「アテネ讃歌」

メレアグロスの詩 二篇

オウィディウス『変身物語』より

英米の文学に歌われたすみれ……………115

イギリス文学に歌われたすみれ……………115

G・チョーサー『薔薇物語』より

E・スペンサー『祝婚前歌』より

『妖精の女王』より

F・ペーコン「庭園のこと」〔『随想集』〕より

R・ヘリック「すみれに」

J・ミルトン『失樂園』より

『リシダス』より

A・マールヴェル「すみれ讃歌」

T・グレイ「歌II」Ⅱ「挽歌」より

W・ブレイク「野の花」

R・バーンズ「私のナニーは遙か遠くへ」

F・ヘマンズ「春の声」より

J・モールトリー「すみれの花の歌」

L・E・ランドン「私はすみれを熱愛する」

W・S・フエイリス「星とすみれ」

A・テニソン「塀に咲いた花」

『イン・メモリアム』より

R・ブラウニング「出現」

C・ロセッティ「スィング・ソング」より

A・P・グレイヴス「薔薇とヘンルーダ」

G・K・チェスタトン「船乗り」

J・メイスフィールド「西風」の歌より

T・S・エリオット『聖灰水曜日』より

W・シェイクスピアのすみれ

.....205

『冬の夜ばなし』より

『夏の夜の夢』より

『十二夜』より

『ハムレット』より (一) (二) (三)

『尺には尺を』より

『ヴィーナスとアドーニス』より

『リチャード二世』より

『ソネット集』より「九十九番」の詩

イギリス・ロマン派の詩人のすみれ

.....230

W・ワーズワース「恋人・ルーシーへの歌」

L・バイロン「アペニン山脈のすみれ」(劇詩)より

「私は君が泣くのを見た」

「チャイルド・ハロルドの遍歴」より

「ナポレオンの別れ」より

J・キーツ「小さな丘の上に立つて」より

「ナイチンゲールに寄せる賦」より

「聖アグネス祭の前夜」より

P・B・シェリー「色褪せたすみれに」

「ある人に」

「音楽」

「思い出」より

「アドネイス」より

アメリカ文学に歌われたすみれ……………

W・C・ブライアント「黄色いすみれ」

R・W・エマーソン「蜜蜂」より

J・G・ホイッティアー「私の遊び相手」より

E・A・ポー「海の中の都市」より

「ユーラリー」

「ヘレンに」より

H・D・ソロー「五月の朝」より

「霧」

W・ホイットマン「ライラックの歌」より

E・ディキンソン「作品番号 三一、三二、九〇」の詩

ドイツ文学及び、他の国々の文学に歌われたすみれ 319

J・W・vonゲーテの詩「みつけもの」

H・ハイネ「碧き春のまなざし」ほか三篇の詩

T・シュトルム「十月の歌」

L・ウーラント「春の歌」

オマール・ハイヤーム『ルバイヤート』より

H・アンデルセン「三月のすみれ」

A・アダ・ネグリ「すみれ」

「牧場」

第四部 すみれの花の音楽 341

クラシック音楽から 342

A・スカルラッティ「すみれ」「モルセルリの詩」

W・A・モーツアルトのリート

「すみれ」「ゲーテの詩」

「春へのあこがれ」「オーヴァベックの詩」

F・シューベルトのリート

「夜咲きすみれ」「マイアー・ホウファアの詩」

F・メンデルスゾーンのリート

「歌の翼に」「ハイネの詩」

「最初のすみれ」「エーゴン・エーバートの詩」

日本の歌から

「春の小川」 高野辰之作詞 岡野貞一作曲

「五月の歌」 青柳善吾作詞 モーツァルト作曲

「四季の歌」 荒木とよひさ作詞 作曲

「すみれの花咲く頃」(白井鐵造作詞 F・デューレ作曲)

参考にした本

あとがき

385 378

371